

【今年度の結果と取組みについて】

〇●国語●〇

(領域ごと)

- ①言葉の特徴や使い方に関する事項 良好な結果であった
- ②情報の扱い方に関する事項 良好な結果であった
- ③話すこと・聞くこと 良好な結果であった
- ④書くこと 概ね良好な結果であった
- ⑤読むこと 良好な結果であった

(問題形式)

- ①選択式 良好な結果であった
- ②短答式 良好な結果であった
- ③記述式 概ね良好な結果であった

(無解答率)

概ね良好な結果であった

(その他)

- ・もともと正答率の低かった設問
設問1(2)図表やグラフなどを用いて、自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫することができるかどうかをみる問題
- ・もともと無解答率の高かった設問
設問1(2)図表やグラフなどを用いて、自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫することができるかどうかをみる問題

分析

全ての領域・問題形式において成果が出ていた。「言葉の特徴や使い方に関する事項」「情報の扱い方に関する事項」「A 話すこと・聞くこと」「C 読むこと」「選択式」「短答式」「記述式」では良好な結果であり、「B書くこと」も、概ね良好な結果であった。

「A 話すこと・聞くこと」のエ「話し手の目的や自分が聞こうとする意図に応じて、話の内容を捉え、話し手の考えと比較しながら、自分の考えをまとめること」「C 読むこと」のウ「目的に応じて、文章と図表などを結び付けるなどして必要な情報を見つけたり、論の進め方について考えたりすること」に関する問題はよくできていた。普段の授業の中でペア学習やグループ学習を用いたり、物語の構成を意識したり、系統的な学習を継続してきた成果が表れている。

一方、正答率の低かったのは「B 書くこと」のエ「引用したり、図表やグラフなどを用いたりして、自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫すること」であった。複数の資料から引用し条件に合わせて書くことに課題がみられる。これは、問題慣れしていないことも考えられるが読書量、読解力や語彙力の課題もその要因であると考えられる。自分の考えを他者に伝えるだけでなく、理解してもらえるように書く意識を育むことが大切である。主語・述語を意識して読ませたり、事実と意見を区別して読ませたりするなど、学年に応じた読解力をつける指導を継続する必要がある。

本校では、「書く力の育成」をテーマとした国語の授業づくりを4年前より継続しているが、今後も文字数や指定した言葉を使ってふりかえりを書く取り組みを継続し、スピーチ、日記、読書活動など教育活動全般を通して国語力の向上に取り組んでいきたい。

(領域ごと)

①数と計算	良好な結果であった
②図形	良好な結果であった
③変化と関係	概ね良好な結果であった
④データの活用	概ね良好な結果であった

(問題形式)

①選択式	良好な結果であった
②短答式	良好な結果であった
③記述式	概ね良好な結果であった

(無解答率) 概ね良好な結果であった

(その他)

・もともと正答率の低かった設問

設問2(4)

高さが等しい三角形について、底辺と面積の関係を基に面積の大小を判断し、その理由を言葉や数を用いて記述できるかどうかをみる問題

・もともと無解答率の高かった設問

説問4(3)

示された棒グラフと、複数の棒グラフを組み合わせたグラフを読み、見いだした違いを言葉と数を用いて記述できるかどうかをみる問題

分析

どの領域・問題形式においても、全国平均を上回り、無解答率も低く、大変良好な結果となった。特に、「数と計算」「図形」に関する問題、「選択式」「短答式」の問題形式が良く出来ていた。加法と乗法の混合した整数の計算をしたり、分配法則を用いたりすることができるかどうかをみる問題では、正答率が90%で全国平均を大きく上回った。

本校では、3年生から6年生で1クラス2分割習熟度別指導を行い担当教員を中心に系統性、継続性のある指導、児童の実態に合わせた分かる授業を研究している。児童に「分かった、出来た」という気持ちを持たせ、前向きに学習に取り組めるよう授業を工夫している。また、複数の教員と連携を取りながら、苦手意識を持っていたり、つまずきが見られたりする児童に声をかけ休み時間に補充学習を行うなどの支援を行っている。これらの児童を理解し、寄り添った指導が今回の良好な結果に繋がったと考えられる。

一方で、全国の傾向と同じく、条件付きの記述問題では課題が見られた。これまで、問題解決学習に取り組む中で、自分の考えを発表する機会を多く取り入れてきたが、加えて算数的用語を理解し、それを使って説明する力を養っていく必要がある。また、授業の最後の振り返りを書く際に、1時間の学習のポイントを書かせたり、条件を提示して書かせたりする取り組みを引き続き行っていきたい。今後も、児童が日々の学習の中で、自身の解答について筋道を立てて説明ができるよう指導をすすめていきたい。

〇●経年比較●〇

全体的な傾向についての分析

国語・算数ともに良好な結果となり、高位層が増加し、低位層が減少した。特に国語が前年度より良い結果が出ている。

無解答率は昨年度よりも低くなっており、「わかる授業づくり」「アウトプットを意識した授業づくり」を軸に、児童の実態や課題を教職員全体で共通認識し、研究を推進してきた成果が表れている。

学力高位層と学力低位層、エンパワー層についての分析

学力低位層は減少し、学力高位層は増加した。学力中位層は微増だった。

一方、エンパワー層では、5年連続減少傾向で昨年度に引き続き0になり、大きな成果が現れている。引き続き、「一人も見捨てへん教育」の考えに基づき、どの児童も興味が持てる授業づくりを進め、学力向上を図っていく。

〇●取組み●〇

学力向上に関する取組み

① 授業改善

- ・「アウトプットを意識した授業を通して、自分の思いや考えを豊かに表現できる「書く」子を育てる」
研究授業・校内研修会の実施
- ・支援人権委員会よりユニバーサルデザインを取り入れた授業づくり
- ・問題解決学習の追求 主体的・対話的で深い学びの授業づくり
- ・算数(3年～6年)1クラス2分割習熟度別指導
- ・算数の習熟度別指導の担当教員を中心とした3年から6年の系統性、継続性のある指導の重視
- ・子どもが分かる授業作り
- ・国語・算数を中心とした言語活動の充実(ペア交流、グループ交流を中心に)
国語 低学年:吹き出しカードの活用、高学年:全文シートの取組み 全学年:並行読書
- ・全教科で「めあて」を明確にし、「振り返り」を大切に授業づくりを行っていく。
- ・西河原スタンダードを基にした授業(授業の進め方、授業に集中しやすい筆箱の中身、挨拶の統一)
- ・ICT機器を活用した授業
- ・1人1台タブレットの活用 ミライシード(ドリルパーク、オクリンク、ムーブノート)、Teams
- ・プログラミング学習
- ・「ことばのちから」を活用した書く力の育成

② 学力低位層を減らす取組み

- ・デジタル教材や視覚教材の活用
- ・実態に合わせた課題の設定
- ・スクールサポーターによる入り込み指導
- ・補充学習の充実
授業時間外での個別補充学習。(15分休み、昼休み、放課後等)
- ・算数教室での自主学習(児童が自ら分からないことを聞きに来ることができる環境づくり)
- ・朝学習で集中して四則計算に取り組む時間の設定。

③ 家庭との連携

- ・家庭学習がんばり週間(家庭学習の定着・充実を図るため毎学期1回実施する。)の実施
- ・保護者へ家庭学習啓発プリントの配布。
- ・学校だより、学年だより、ホームページにて教育活動内容とその目的、授業中の児童の様子発信。

④ 保幼小中連携

- ・合同研修会の実施
中学校ブロックで連携してブロックの課題解決について協議。
連携カリキュラムの実施・検証・改善。
- ・小中合同研究会の実施
「通常学級での支援～支援の観点を取り入れた授業～」をテーマに継続的な力の育成を研究。